

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.27 No.9 September 2026

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

CONTENTS

・巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その6
／井上 昭洋 1

・天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」 (23)

ヨーロッパにおける天理教の伝道の諸相⑫
／加藤 匡人 2

・台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (33)

先住民村落におけるキリスト教会
／山西 弘朗 3

・教内の福祉の歴史 (5)

「社会福祉とは何か？」の歴史
／松原 浩一郎 4

・「おさしづ」にみる教会の展開 (新連載)

2代真柱による「おさしづ」解説
／澤井 治郎 5

・日本占領期の香港—植民地研究の視点から— (11)

地方行政制度を通じた「分区統治」の実施
／山本 和行 6

・2026 年度公開教学講座：布教伝道と伝道学 (3)

第3講：異文化伝道論—コンゴでの伝道とその課題—
／森 洋明 7

・おやさと研究所ニュース 8

第389回研究報告会 (7月27日) / 新連載執筆のねらい / 2026 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「元初まりの話」の読まれ方・その6

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

カンボジアのアンコールワットを訪れるのが山折哲雄である。山折は「元の理(元初まりの話)」は何度読んでも分からない難しい説話であると言うが、そのテキストに彼は渦を巻く泥海のダイナミックなイメージを抱く。一般に、創世神話は混沌から秩序への移行を象徴的に描くが、山折によれば「元の理」はそれとは異なる。カオスの世界(泥海)が、絶えることなくそのエネルギー、ダイナミズムを持ち続けており、その中で生きとし生けるものが浮沈を繰り返す世界を描いているという。

乳海攪拌とは、古代インドの叙事詩である『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』に出てくるヒンドゥー教の創世神話である。神々とアスラが不老不死の霊薬アムリタを得るために、ヴィシュヌ神の化身ともされる巨大な亀クールマに支えられたマンダラ山を軸棒として、それに大蛇ヴァースキを巻き付けて引っ張り合い、回転させて乳海を攪拌するという物語だ。攪拌によって、太陽や月、神聖な動物、天女や女神など、様々なものが生まれ、最後にアムリタの入った壺が現れる。アムリタを巡って神々とアスラは争うが、美女に化けたヴィシュヌ神の機転によって、神々はついにアムリタを手に入れるのである。

ガイドの説明を受けながらこのレリーフを見た時、「元初まりの話」の泥海のことを思い浮かべずにはおれなかった。濁った海にうごめく無数の魚(乳海攪拌)やドジョウ(「元初まりの話」)、そしてその他の水棲動物。加えて、両者に共通して重要な役割を果たす亀の存在。乳海と泥海は、原初の海というモチーフを共有しているように思えたが、レリーフを見て得られる気づきはここまでだった。乳海攪拌の説話の内容をより詳しく知っていれば、「元初まりの話」を中心とする天理教の教義・世界観との類似性について、もっと多くの気づきを得られていたに違いない。

「泥海古記」とも呼ばれる「元初まりの話」と乳海攪拌の類似性について言及して

山折は「元初まりの話」の海洋的な性格に言及するが、その指摘自体はそれほど珍しいものではない。もっとも彼は、日本の神話や伝承では、水棲動物を神とする考えから、陸棲動物を神とする考えに変化していったと言う。そうだとすれば、海洋神・河川神の性格をもった生き物が登場するこの創世説話は、日本の極めて古い時代の信仰を反映していることになる。この論点にはなるほどと思わされる。

彼は「泥海古記」と乳海攪拌の神話に幾つかの共通点をあげる。流動するダイナミックな原初の海、重要な役割を果たす亀や細長い生物(蛇・ウナギ)、甘露とアムリタなど。さらに、宇宙の攪拌から生まれ、天地を結ぶようになった宇宙樹の神話に着目し、甘露台もまたそうした攪拌の果てに立ち現れる聖なる中心であり、その背後にダイナミックな宇宙の神話が横たわっていると考える。彼の論考を読み込むと、ちばと甘露台に、大亀クールマとマンダラ山(軸棒)をそれぞれ照応させることができ、両者の共通性はさらに深みを増す。

〔註〕

(1) 山折哲雄(1988)『「元の理」を読む—『陽気ぐらし』学としての『元の理』』『G-TEN』第28号、83～95頁。(『講座「元の理」の世界2：「元の理」の象徴学』に再録)